

博士（経済学）
学位請求論文
要旨

サフォーク・システムの「自生性」
アメリカ中央銀行制度の萌芽的な形態

大森 拓磨

南北戦争以前のアメリカ金融制度の展開が、いわゆるフリーバンキング理論をめぐる歴史的論拠の当否との関連で注目されている。当時、中央銀行がなく、各商業銀行によって通貨が濫発されるという混沌とした状況のもと、州や地域単位で、当事者達による通貨・信用管理が自発的に試みられていたからである。本論では、これらの試みのうち、ニューイングランドで自生したサフォーク・システムに注目する。

サフォーク・システムの「自生性」には、2つの分析的意義がある。

1つ目は、理論的な意義である。サフォーク・システムの「自生性」は、一見すると、「自由放任」のもとで成功裡に展開された私的な決済システムなのか、「通貨・信用秩序の不安定性に対処するために一商業銀行が中央銀行的な機能を担おうとした過程」なのか、評価が揺れる。それゆえ、いわゆるフリーバンキング理論の擁護・批判のどちらの立場にも有力な歴史的論拠として引き合いに出され、特異で曖昧な性格を帯びている。したがって、サフォーク・システムの「自生性」の内実を吟味することは、フリーバンキング理論をめぐる歴史的評価を左右する、重要な鍵となる。

2つ目は、歴史的な意義である。サフォーク・システムの「自生性」は、アメリカ中央銀行制度の組成に繋がる有力なモデルとなったのか否か、評価が分かれている。通説では、同時代のニューヨーク州自由銀行制度の展開がアメリカ中央銀行制度の源流として注目され、サフォーク・システムの存在意義は消極視されている。したがって、サフォーク・システムの「自生性」の内実を解明して、アメリカ中央銀行の成立前史におけるサフォーク・システムの歴史的な意義を探ることが、重要となる。

以上の問題意識を踏まえ、本論では、フリーバンキング批判の見地から、サフォーク・システムの「自生性」を、「通貨・信用秩序の不安定性に地域単位で対抗するために、一商業銀行が中央銀行的な機能を試行錯誤しつつ体得してゆく過程」として考える。この仮説を念頭に、サフォーク・システムの「自生性」をめぐるその実態を解明する。

第1章では、サフォーク・システムの起源を辿り、サフォーク・システムの「自生性」が生まれる土壌について、実態分析を行っている。

18C から 19C 初頭にかけて、ニューイングランドでは、アメリカの他の諸地域に先駆けて、早くも、通貨・信用秩序の不安定性への対抗を目的とした、当事者たる有力な諸商人や商業諸銀行による組織的な対応が、試行錯誤されつつ繰り返し試みられた。私的に兌換組織を張った通貨・信用秩序の管理が、地域単位で、各種公権力とも絡みつつ、当事者達の私的な経済的利害に基づいて自発的に行われる素地が、すでに存在したのである。

第 2 章では、サフォーク・システムの生成過程を分析している。

上記の背景を踏まえ、1810 年代末、ニューイングランドの商業中心地ボストンに、商業銀行の The Suffolk Bank が登場し、サフォーク・システムが組成される。サフォーク・システムは、当初、減価しつつ市中に滞留する各種銀行券通貨について、割引購入して兌換を実現し私益を挙げるシステムとして、展開された。やがて、The Suffolk Bank を中心にボストン所在の諸銀行が協力するかたちで、ニューイングランド各地に所在する各発券銀行から現金準備を集め、市中に横行する減価銀行券を額面通りに集中兌換するシステムへと変質する。サフォーク・システムは、ニューイングランドの通貨・信用秩序を安定化させる、より社会性を帯びた管理システムへと、進展を遂げる。だが、背後では、ニューイングランド各地の一部の地方銀行との確執、ボストン所在の各商業銀行との協調破棄、合衆国銀行との拮抗した競争関係など、The Suffolk Bank との「利害対立」が幾重にも内包された、極めて不安定なシステムであった。こうしたなか、サフォーク・システムの運営を通じて、The Suffolk Bank は、システムへの参加を承諾したニューイングランド各地に所在の発券諸銀行から、準備を集中させる。この準備集中を基盤に、The Suffolk Bank は、銀行間預金を集中させて、多数の他行口座を集中管理し、銀行間決済システムを集中させてゆく。また、額面通りの集中決済を円滑に遂行し続けることで、ニューイングランドで流通する銀行券通貨の減価防衛を阻む、「通貨の番人」としての役割を担い始める。The Suffolk Bank は、私的事業としてのサフォーク・システムの運営を介し、ニューイングランドの「銀行の銀行」として、中央銀行的な機能の一部を、地域単位で内生させ始めたのである。

第 3 章では、未曾有の世界恐慌、1837・39 年の両恐慌の襲来に、サフォーク・システムがどこまで対処しえたのかを分析している。

1830 年代、州主権を重視した連邦統治を推進する「ジャクソニアン・デモクラシー」の風潮のなか、ニューイングランド各地で、州法に基づく商業銀行の新設が激増する。同時に、各商業銀行による、準備高を大幅に超えた自行銀行券の濫発で、与信量が膨脹する。これに対し、The Suffolk Bank は、「道義的説得」や「ペナルティ・レート」の賦課」を実践し、発券総額の社会的な抑制に努める。それと共に、未決済の各種銀行券の兌換を促した。The Suffolk Bank による「道義的説得」や「ペナルティ・レート」の賦課」、各種銀行券の兌換の促進は、マサチューセッツ州やメーン州の一部の地方銀行からの反発を生む。だが、アメリカ全土を揺るがした 1837・39 年恐慌の襲来にも、ニューイングランドだけは通貨・信用秩序の著しい動揺を免れる。それは、The Suffolk Bank による、サフォーク・システムの運営を通じた、「支払・決済システムの継続」と「他行貸付の増大による流動性供給の安定化」とが、奏効したためである。恐慌が波及して正貨支払が全面停止されたときに、The Suffolk Bank は、ニューイングランドの「銀行の銀行」として、「最後の貸手」機能を自発的に実践したのである。The Suffolk Bank は、1830 年代、「道義的説得」や「最後の貸手」機能を実践し、中央銀行的な機能をさらに育成させる。1837・39 年の両恐慌から

ニューイングランドの通貨・信用秩序の動揺を防いだ実績を機に、1840年代、サフォーク・システムは、社会的な信認をいっそう高め、業務規模をさらに拡張させたのである。

第4章では、サフォーク・システムがなぜ崩壊したのか、分析が施される。

サフォーク・システムが崩壊した要因は、3点ある。第1点は、「利害対立」である。すなわち、サフォーク・システムを援用した The Suffolk Bank の通貨・信用統制に対する、地方諸銀行からの反発である。この反発は、サフォーク・システムに対抗するためのシステム、BMR システムの誕生に結実する。BMR システムが軌道に乗ると共に、サフォーク・システムは姿を消す。そこで、地方諸銀行の反発から BMR システムの生成・展開に至る過程、サフォーク・システムと BMR システムとの競争過程が追究される。第2点は、「金融拠点としてのニューヨーク市の台頭」である。金融拠点がボストンからニューヨーク市に移ると共に、銀行間預金もまたニューヨーク市に所在の諸銀行へと移り、サフォーク・システムや BMR システムの存在意義が希薄化する。第3点は、「南北戦争の勃発と州法銀行制度の終焉」である。南北戦争の勃発と共に、いわゆる北軍を金融面で支えるために、国法銀行制度の導入が図られ、州法銀行券の流通や州法銀行の展開が抑圧される。州法銀行制度を大前提に成立していたサフォーク・システムは、その大前提さえも失ったのである。

終章では、サフォーク・システムの「自生性」の内実を総括したうえで、結論として、冒頭で掲げた2つの分析的意義に対する回答や再評価を明示している。

結局、サフォーク・システムの「自生性」とは、「通貨・信用秩序の不安定性に地域単位で対抗するために、一商業銀行が中央銀行的な機能を試行錯誤しつつ担おうとした過程」である。「自由放任」のもとで成功裡に展開された私的な決済システムではない。したがって、理論的な見地から、サフォーク・システムの「自生性」は、いわゆるフリーバンキング理論を擁護する歴史的論拠とは成り得ない。この「自生性」は、中央銀行なき時代に、地域単位で、当事者たちの経済的な利害を軸に、一商業銀行が中央銀行的な役割を担い、一定期間ながら通貨・信用管理を成功させた、アメリカ中央銀行制度の萌芽的な一形態、と捉えられるべきである。結局、サフォーク・システムは、アメリカ全土を統轄する中央銀行制度にまではなり得なかったが、一商業銀行が中央銀行の性格をどこまで内生的に体得してゆきうるのかという点を如実に体現している特異な事例であることから、中央銀行の原理を考察するうえでの有力な一対象として、把持されうる、と考えられる。

また、アメリカ中央銀行制度の成立前史におけるサフォーク・システムの歴史的な意義は、以下にある。すなわち、中央銀行がなく、発券集中がもたらされていない状況下で、1つは、サフォーク・システムが、各商業銀行によって濫発される各種銀行券を額面通りに集中決済する機構を、成功裡に実現させた。それゆえ、サフォーク・システムの基本原則や経験が、のちの国法銀行制度の運営過程やその制度修正論議の過程において、国法銀行券を額面通りに集中決済する機構を整備するうえでの有力なモデルとして重視された。もう1つは、隔地間決済の基盤となる、地域外小切手の額面決済システムの有力なモデルとして参照された。この2点において、アメリカ中央銀行制度の成立過程におけるサフォーク・システムの意義はもっと積極視されてよいと考えるのである。